

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13368

研究課題名（和文）北宋軍事基盤と西北「辺境軍事社会」の東部ユーラシア世界における歴史的意義

研究課題名（英文）The historical significance on the military infrastructure and northwest frontier-military society during Northern Song Dynasty under the Eastern Eurasia

研究代表者

伊藤 一馬 (ITO, KAZUMA)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・招へい研究員

研究者番号：90803164

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて得られた成果を整理すると以下の通りである。（1）11世紀半ば以降に軍事的重要性を増した西北地域では西夏に対する防衛戦略・情報伝達システムに基づく経略安撫使体制が整備され、以後の軍事体制の基盤となった。（2）北宋の軍事行動を支えたのが「西兵」と呼ばれる軍団であり、北宋の最強の軍事力として各地の戦線にも投入された。特にチベット系・タングート系の蕃兵が精強であり、北宋は蕃兵の確保に注力していた。（3）軍事力を維持するための財源や軍事物資は、全国的市場や東部ユーラシア規模の交易ネットワークと結びついてきたほか、西北地域の域内においても調達・輸送され、重層的な財政・物流に支えられていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果により、一般に文治主義・中央集権を推進し、軍事的には劣勢であったと認知される北宋が、実際には莫大な軍事力を擁し、膨大な軍事費を支出していただけでなく、軍事力や軍事費を調達・確保するために様々な施策を実施していた軍事大国であったことが明確となった。また、北宋の滅亡の背景には、東部ユーラシアの国際情勢に対応する軍事面での要因もあった。従来、宋代史研究においては「中国China Proper」の枠組みの中で理解される傾向にあったが、本研究を通じて東部ユーラシアというより広域の空間における歴史展開に位置づける必要もあることが明確になったはずである。

研究成果の概要（英文）：Through this research, we obtained the following results. (1) In the northwestern region, which gained military importance from the mid-11th century onward, the military commissioner system was established based on a defense strategy and information transmission system for Western Xia, which became the basis of subsequent military systems. (2) A corps called the 'Western Armies' supported the military operations of the Northern Song Dynasty, and was deployed to various military fronts as the strongest military force of the Northern Song Dynasty. Especially, the Tibetan and Tangut tribal warriors were the most powerful and the Northern Song Dynasty focused on securing barbarians. (3) The financial resources and military supplies needed to maintain military power were not only connected to the national market and trade networks across Eastern Eurasia, but also procured and transported within the northwest region, resulting in multilayered financial and logistics systems.

研究分野：中国宋代史

キーワード：北宋 辺境軍事社会 西兵 経略安撫使体制 東部ユーラシア 蕃兵 石窟題記銘文 「宋西北辺境軍政文書」

1. 研究開始当初の背景

10世紀後半に成立し分裂・動乱状態にあった「中国 China Proper」の再統一を達成した北宋は、一代を通じて契丹・西夏・ベトナムの三勢力との間に軍事的・外交的緊張を抱えており、時に100万を超える軍事力を擁し、またその維持に要する軍事費が財政支出の8割に上るなど、「軍事大国」であったと言える。一方で従来の北宋軍事史研究は、北宋は成立当初より推進したとされる中央集権・文治主義の観点から進められてきたという傾向を有していた。

これに対して、2000年代以降より、中国・台湾の研究者を中心に中央集権・文治主義という前提に見直しを迫る研究成果も発表されている。また、ややもすれば「宋代」や「中国」という時間的・空間的枠組みの中でのみ論じられてきた北宋軍事史に対して、唐末五代期の遊牧集団の動向や中央ユーラシア史の展開と接合しようとする沙陀・テュルク・ソグド研究の成果もあり、北宋軍事史研究には新たな潮流が生じていると言える。さらに、宋代史研究においては周辺諸地域との連動性を視野に入れつつ、「中国」をユーラシア規模の歴史展開に位置付ける必要性も提起されている。

しかしながら、北宋軍事史研究の成果においては、唐末五代期からの歴史展開や、当時の東部ユーラシア情勢との関わりについてはほとんど意識されていない。また、沙陀・テュルク・ソグド研究においては、遊牧諸集団が北宋の軍事行動や軍事体制の中で、具体的にどのような役割を果たしていたのかという点については、明らかにされていない。さらに、その軍事力の運用を支える物資・財源については、個別に検証されることはあっても、軍事政策と経済・財政政策の具体的な接合やそのシステムがどのように成り立っていたのか、という点は大きな課題として残されていると言える。

2. 研究の目的

本研究は大きく次の2点を通じ、宋代中国を東部ユーラシア規模の歴史展開に位置づけることを目的とした。(1) 10~12世紀の東部ユーラシア情勢との結びつきを念頭に置きながら、指揮官や軍事力の出自・来歴の分析を通じて、契丹や西夏と対峙する軍事前線地域が北宋の軍事基盤であり、それが対外情勢の推移に呼応して北辺地域から西北辺地域に移行していくことを示し、さらに軍事基盤としての西北辺地域の役割は南宋成立後にまで継承されていたことを明らかにすること。(2) 軍事前線地域における軍事力の運用、それを支えるヒト・モノ・カネの動きを多面的に捉えることで、北宋の「辺境軍事社会」の実態に迫ること。

3. 研究の方法

本研究では、上記(1)(2)の目的を達成するため、以下の方法をとった。

(1)

・軍事指揮官や武人の出自、経歴の分析

編纂史料や墓誌史料から北宋期の軍事指揮官や武人の伝記史料を蒐集し、その出身地・経歴・出自などを抽出・整理し、北宋の軍事行動・軍事体制の中核を担う軍事基盤がいかなる人々であったのか検討した。

・軍事体制、統治体制における役割の検討

軍事前線地域における軍事行動や軍事体制、統治体制の中で、軍事指揮官や武人が具体的にどのような役割を担っていたかを検討した。

・東部ユーラシア情勢における北宋の軍事基盤

北宋を取り巻く軍事・外交的緊張が契丹(北辺)、西夏(西北辺)、大越(南辺)において共時性、連動性を有していることを確認したうえで、北宋がどのような対応を取ったのか整理した。

(2)

・北宋軍事基盤としての西北辺地域

軍事指揮官や武人には非漢人や遊牧系の人々、西北辺地域の在地出身者が多く含まれることを明らかにし、西北辺地域が北宋の軍事基盤となりえた要因として、農牧接壌地帯としての特徴があったこと、在地社会への依存度が高かったことを示す。

・ヒト、モノ、カネの動きの検証

非漢人、遊牧系の人々の確保やリクルート、軍事物資の調達・輸送・管理、財源の確保がどのように行われていたのかを検証した。物資として具体的には軍馬、馬草、食糧、衣服に加え、火器原料となる硫黄に着目し、それらを運ぶ商人の動向も念頭に置き、「中国」内外の交易・物流網や商人ネットワークとの関わりを検討した。

・「宋西北辺境軍政文書」、石窟仏教銘文の利用

カラホト出土の「宋西北辺境軍政文書」や甘粛省・陝西省・寧夏回族自治区に散在する仏教石窟題記銘文を利用し、軍事前線地域における軍事物資の流れや軍事・財力・仏教の結びつきを検討した。

4．研究成果

本研究で得られた成果は以下の通りである。

北宋西北地域における財物は、宋代に形成された全国的物流・全国的市場や東部ユーラシア規模の交易ネットワークと結びついて支えられていた一方で、西北地域の域内での様々な手段での軍糧確保・輸送が見られ、また財源として中央・地方から見銭・絹織物・香薬・茶、多様な鈔引（有価証券）が投入されていたことなどが確認でき、重層的な経済・財政・交易・物流圏が形成されていた。また、財源としての度牒や師号、紫衣などの出売、僧侶の軍事行動への参戦、寺院での避難民や商人の受け入れなども確認でき、西北「辺境軍事社会」において仏教が軍事や財政・経済と密接に関わっていたことが明らかとなった。

北宋の成立直後から契丹との盟約が成立する 11 世紀初頭までの時期は、北宋にとっての最大の脅威は北方の契丹（遼）であり、契丹と接する河北・山西地域が北宋の軍事力の供給源となっていた。また、指揮官には沙陀・ソグド・吐谷渾・奚などの遊牧系武人も見られ、遊牧集団も禁軍の部隊を構成していた。その後、11 世紀半ばに勃発した西夏との軍事衝突を契機として、西夏と対峙する西北地域の軍事的重要性が高まると、これらの地域出身者が北宋軍事力の中核を担うようになった。以後、絶えず軍事的緊張が続く西北地域の軍事力は「西兵」として重視され、対西夏戦線のみならず北方の対契丹・対金戦線や南方の対ベトナム戦線、儂智高の乱や方臘の乱などの反乱の鎮圧など各地に動員されており、北宋の軍事情勢を広く支える存在となっていく。

西夏軍の侵攻に備える西北地域では、西夏軍の軍事行動や兵力・経路などを迅速かつ正確に察知・伝達するために烽火台（烽燧）や偵察部隊、駅伝などの情報収集・情報伝達の手段・組織が整備され、その情報をもとに各拠点に配置された兵力が連携して対応するという防衛戦略が北宋側の基本的な姿勢であった。そして、情報収集・伝達や作戦行動の実行において重要な役割を果たしていたのが、軍事拠点である堡寨およびそこに駐屯する部隊・指揮官であった。西北地域で確立された経略安撫使体制は、末端の烽火台や堡寨から経略安撫使をつなぎ、西夏軍の侵攻を前提とした防衛戦略を体現するためのものであったと言える。また、唐後半期からの地方軍事体制の変遷は、唐後半期の節度使体制、北宋初期の都部署体制、そして宋夏戦争期以降の経略安撫使体制と推移したと位置づけることができる。そして、この経略安撫使体制が、北宋滅亡・南宋後退期にいたるまで、西北地域における軍事体制の基盤として存続していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 40
2. 論文標題 「東部ユーラシア」の現在	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神女大史学	6. 最初と最後の頁 53～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 なし
2. 論文標題 定難軍節度使から西夏へ：唐宋変革期のタングート	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山根直生（編）『五代十国：乱世の向こうの「治」』勉誠社	6. 最初と最後の頁 257～270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 39
2. 論文標題 北宋の対西夏戦略と情報伝達	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神女大史学	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 なし
2. 論文標題 北宋最強軍団とその担い手たち	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター（編）『金（女真）と宋：12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交』研文出版	6. 最初と最後の頁 67～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 23
2. 論文標題 書評：岩崎力著『西夏建国史研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 111～118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 なし
2. 論文標題 宋代における筍子の登場とその展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宋代史研究会（編）『宋代史料への回帰と展開』汲古書院	6. 最初と最後の頁 329～361
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 なし
2. 論文標題 北宋仁宗時期的対西夏戦略与信息伝通	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 移動・流動と互動：跨域的歴史と歴史的跨域 東亜地区青年学者遼宋夏金元史国際研究会会議論文集	6. 最初と最後の頁 92～106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤一馬	4. 巻 なし
2. 論文標題 「宋西北辺境軍政文書」と宋代の軍事体制	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 平田茂樹・山口智哉・小林隆道・梅村尚樹（編）『宋代とは何か：最前線の研究が描き出す新たな歴史像』勉誠社	6. 最初と最後の頁 229～237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 「東部ユーラシア」と「宋代中国」
3. 学会等名 第59回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 北宋の西北辺境軍事社会と軍事財政
3. 学会等名 第10回若手ユーラシア研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 文書・碑刻史料からみる宋代中国と東部ユーラシア
3. 学会等名 第6回高大連携歴史教育研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 北宋の軍事基盤とその展開：靖康の変と西兵軍団
3. 学会等名 第3回若手ユーラシア史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 北宋最強軍団とその担い手たち：セン淵の盟から靖康の変へ
3. 学会等名 第16回京都大学人文科学研究所TOKYO漢籍SEMINAR（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 北宋仁宗時期的対西夏戰略与信息伝通
3. 学会等名 移動・流動与互動：跨域的歴史与歴史的跨域 東亜地区青年学者遼宋夏金元史国際研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤一馬
2. 発表標題 北宋の「辺境軍事社会」としての対西夏前線地域
3. 学会等名 第222回宋代史談話会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------